

# 地球を読む

人間が生物として生きていくために欠くことのできない「飲むもの」と「食べるもの」は、これからの世界で十分に供給されていくのだろうか。



渡辺 博史

国際通貨研究所  
理事長

## 飲食物の確保

を正しく理解していれば、それらは誤りではないが、問うべきは「供給されていくのだろうか」ではなく「需給をバランスさせられるか」である。報告書は、爆発的な人口増加のもと経済成長を追求し続けられ、100年以内に食料や資源の

## 水の利用 優先順再考を

ルで幅広く行われている。再生処理水はトイレだけでなく「NEWaler（ニューウォーター）」として飲用にも使われている。「日本やフィリピンは水を無駄遣いしている」とよく言われる。急峻な国土のため大量の雨が降っても極めて短期間に海洋に流出してしまう。これが「湯水のように使う」理由だとすれば、河口に遊水地を造り、水を大量に貯留することも真剣に考えるべきだ。

〈2面に続く〉

のか考えたい。冒頭で「十分に供給されていくのだろうか」と、ついで書いてしまったが、こう書いた言いは経済人や似た思考パターンを持つ人たちの悪癖、あるいはある種の呪縛である。需要は人間の

幸福追求の表れであり、需が満たされれば、それを満たすために供給増加を追い求めることが正しい、と刷り込まれている。だが、研究機関「ローマクラブ」が1972年に発表した報告書「成長の限界」

枯渇で破局を迎えると警告した。猶予はあと50年ほどしかないのだ。では、水はどういう面で人間にとって必要なのか。生成AI（人工知能）に問えば、五つや六つの使い道がスラスラと列記される。

設置は難しくても、大規模施設のトイレなら取りかえられるかもしれない。トイレで流す水は再生処理した水でもよいといった「循環策」を考えることも有益だ。実際に都市レベルの試みとして、シンガポ

「液体」の水の再生循環利用の例である。一方で、海も川もなく、雨もほとんど降らない地域をどうするかという課題もある。そもそも地球上に、すぐに使える淡水はどれほどあるのか。答えは「海水も含めた全ての水の0.01%」である。想像もつかないほど希少なのだ。

# 地球を読む

渡辺博史氏 1949年生  
まれ。財務省国際局長、財務官、国際協力銀行総裁などを  
経て2016年10月から現職。経済に関する著作多数。

冷たい水を入れたコップにつく水滴のように、空気中の水蒸気を液体にする技術の開発が進められているという。かつてより機材の小型化や電気使用量の削減が図られているようだ。水のない地域、特に人口密度の低い地域での活用が期待されている。

地球上にある淡水には、すぐに利用できるものも大量にある。そのほとんどが氷河など極地や高地で凍結している水だ。これを氷のまま、あるいは解かした液体の水にして運ぶ構想は昔からあるが、膨大な搬送コストを理由に検討は立ち往生している。

しかし、お金で済む話なら、地球温暖化で氷壁が崩落してしまふ前に再考すべきではないか。コスト面の課題は大きい、水の必要性とコストのどちらを優先

## 節約と増産の促進 課題

するのかわらぬか。時期にきたように思う。食料も水と同様に、最も大切なのは節約だ。開発途上国での「摂食制限」は避けるべきだが、先進国では「飽食」が続く、新興国にも広がってきた。飲食店や食料品売り場から出る大量の売れ残りを目的にすると、食品の過剰な製造を抑制すべきだと痛感する。在庫のIT管理や冷凍食品の拡大による保存期間の延長などを積極的に進めたいかねばならない。

一定の「自給自足体制」の構築も大切になる。国際情勢の緊迫化により、物流が阻害されるリスクが高まっているためだ。私は以前、世界銀行と大げんかした記憶がある。世銀が西アフリカ各国に「

流通・加工への配慮にも着目してプロジェクトの可否を評価すべきである。節約に加えて代替食品の利用も促進したい。生産の環境負荷が大きい畜産物から豆を含む穀物へのシフトには「食感」のハードルがあるが、大豆原料の代用肉などの品質は向上した。昆虫食もそのまま食べるのは抵抗があるだろうが、

粉末化した上での利用は今後、進めていかざるをえないだろう。一定の「自給自足体制」の構築も大切になる。国際情勢の緊迫化により、物流が阻害されるリスクが高まっているためだ。

私は以前、世界銀行と大げんかした記憶がある。世銀が西アフリカ各国に「

る」と主張した。近隣諸国と共同で生産計画を立て、基礎食糧の生産体制を構築していくべきだ。今後人口の急増が見込まれるアフリカにおいて、増産の対象作物を何にするかは重要な問題である。豆、芋、トウモロコシに加えて何を栽培するか。小麦なのかコメなのか、真剣に考える必要がある。小交は同じ場所で栽培を続けると収穫が減る連作障害がある。「2年3作」といった輪作体制をとり、合間にクローバーのような緑肥作物を育てる「立毛間播種」などの工夫が要る。一方、コメは連作可能でコストを低減しうる。コメの品種改良は「寒冷地」で育つものを主眼としてきたが、最近「高温・乾燥」に耐性のある品種の開発の比重が増している。アフリカの気候に対応した品種の

栽培も進む。コメ栽培の最大の課題は水の確保だ。アフリカ南東部を流れるザンベジ川は流量豊かであり、早急に活用を図るべきである。中部のコンゴ川も同様のポテンシャルがあるが、流域では武力紛争が続いており、農業開発は残念だが、まだ難しい。紛争には周辺国も関与しているとみられる。国際監視の枠組みのもと沈黙化を図りたい。小麦もコメも増産するには経費がかかり、同時に利権も生まれる。放任すれば特定の国家間の協約や、国と企業が結んだ契約によって、食糧生産への自由なアクセスが妨げられる可能性が高い。オープンな食糧生産市場を確保するため、国際的な枠組みを構築する必要がある。

英文は金融日報のジャパン・ニユースに掲載予定です